

---

# かぐわしい男

林茶々丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かぐわしい男

### 【Nコード】

N7885Y

### 【作者名】

林茶々丸

### 【あらすじ】

実際の人物とは関係ありません。

始業30分前。大抵、私の上司は机にいる。始業は8時半で、20分ごろからばたばた来る社員が多い中、彼はまじめなのかもしれない。早く来たら当然仕事をしている。ただ、家族に追い立てられて出勤しているのではと、周囲には思われている。

「はあ。涼しいなあ」

話しかけてもいないのに、つぶやきだした。暑苦しい。やめて欲しい。

「中島さんもそう思わない？」

「そうですね」

「俺の家、クーラーが壊れちゃってさ。この時期は地獄だよねえ。」

日曜日は家でごろごろしていたんだけど、窓を開けて扇風機を回しても暑くてさあ」

私は彼よりも彼の家族に同情した。

私の真後ろに座る上司、出雲哲は、控えめに表現しても臭い。社会生活が許される範囲内だとは思うが、夏に机を数メートル離れたくなる程度には臭い。脇の黄色い汗しみ、襟元の黄ばみ、キーボードのべたつき、しゃべるときに飛ぶ唾。ハンカチなんて持っていないし、温風の出る乾燥機も使っていないらしく、ズボンの横はよく湿っている。彼の使った湯のみは、なんとなく残り香からわかってしまう。新人社員の彩香ちゃんは、彼から渡された書類を指先でつまみ、ティッシュで軽くこする習慣を持つようになった。照れたようにぼりぼり頭をかけば大事な書類にフケがばらと落ちる。彼のゴミ箱からこぼれたティッシュを拾ってあげる善人は、とりあえず事務所内にはいない。そんなレベルだ。

出雲さんはやけにぱちぱち大きな音を立ててキーをたたいていた。そんなにアピールしなくても、仕事をしていないだなんて言いふらさない。もっと静かにして欲しい。たたく力が強すぎてマウスやキ

ーボードを壊し、交換してもらったこともあるらしい。まっさらな機器が彼の指紋で薄汚れていくのは、少女がすれた中年女になる過程を見るようだったとか何とか。彼のデスクにあるものは、すべてどこか黒ずんで見える。

突然、電話が鳴った。始業前まで応対はしたくないし、どうせ「

はまだ出社しておりません」と折り返す羽目になるのだ。誰もいないのだと思って切れば、向こうも無駄な期待をしないですむじゃないか。が、出雲さんはいつでも率先して電話に出る。

「お電話ありがとうございます。吉田運輸の出雲です。……ああ、武田部長。おはようございます。……今は中島さんしかいませんね。よく働いてくれますよ。おまけに美人なんですよ。……そうなんです。俺のチームでは俺だけ男なんで、うらやましがられちゃって」私の名前を出さないでくれ。このチームはあんたのハーレムじゃない。私以外は30代40代の既婚者じゃないか。ちらりと振り返って見れば、『君の仕事ぶりはアピールしたよん』とVサインをしている。

電話を切った彼は、さりげなく放屁した。あわててファイルをあさったり椅子をきしませたりしてごまかしているが、残念ながらばれている。私は共有パソコンを起動するかのごとく席を立ち、さりげなく窓を開けてあげた。

小気味よいヒール音で、3人目が出勤してきた。

「おはようございます」

「おはよう」

「おはよう彩香ちゃん」

出雲さんは黄ばんだ歯を見せて微笑んだ。

「……おはようございます」

彩香ちゃんは私にぺこりとお辞儀をし、出雲さんの机に近づかないよう遠回りし、ホワイトボードのネームプレートを動かして『出勤』にした。入社したときと比べると、彼女の甘い香りが強くなった。理由は言わずもがな。

「そういえば、社内バーベキューのときに出雲さんの奥さんは来ませんでしたね。そういう集まりは苦手なんですか？」

私が何かの折に尋ねたら、先輩たちは顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。

「顔を出せたもんじゃないよね」

「そうそう」

「中島さんは知らないかもね。出雲さんの奥さんは、うちの社員だったの。就職が決まらなくて、縁故でここに来た人なんだけどね。トイレで念入りにメイク直したり、自分の仕事が終われば他全員が残業していてもさっさと帰ったり、来客が来て誰かお茶を入れなくちゃいけなくなったときわざと電話やトイレでその場を逃れたり、あまり印象はよくなかったみたい」

2人の先輩は声を潜めて教えてくれた。

「当時は、出雲さんもそんなに臭くなかったし、まじめな働きぶりだったし、面倒な姑なんかもついてこないということで、評価は悪くなかったのよ。それで、彼に気に入られた彼女も、まんざらじゃなかったわけ。さっさと寿退社したかったみたいだし」

「今でも彼女を知っている人は社内にいるし、あんな状態の旦那を見られちゃ、妻として顔を出せないと思う」

「彼女のせいばかりじゃないと思うけど。典型的な、奥さんをもったら自分じゃ何もなくなるタイプなんですよ。彼女は彼女で、お金を入れてくれるだんなを見つけたら、財布の紐を握って楽しかったタイプというわけ」

「子供たちは母親側についているみたいね」

「そりゃそうよ。あんなお父さんじゃ、友達に見せられないでしょ。つまりはそういうことらしい。」

なお、面倒な姑がついてこないという件は、『一回り以上離れたお兄さんたちがいて、親の世話はそっちに任せているらしい。いかにも甘やかされた末っ子でしょ』という説明をもらった。

私はあんなのを捕まえないようにしようと思う。

旦那について元同僚に笑われたくないから、出雲さんの奥さんは表に出てこない。しかし、残念ながら、彼は妻子をけっこう愛しているようだ。

「これ、子供たちの写真。見てよ」

「明日は子供の運動会だからフレックスを使います」

とニヤニヤしながら言う。ちなみに、子供たちはあまり彼に似ず、けっこうかわいいのだった。さすがに、彼のタネじゃないのだろうとうわさする人間はいなかったが、疑わずにはいられない。

「昨日、俺の奥さんがさあ……」

と貴重な昼休みに話しかけられれば相手はげんなりするし、電話で仕事と無関係な家族自慢を始めれば周囲はため息をつく。それでも、出雲さんは気づかない。

彼女が顔を出さなくても、彼女がどんな女性なのかはみんな知っている。

今夜の食卓にはなすが乗っていた。レンジで熱を通して、ポン酢やしょうがをのせるというメニューになることが、我が家では多い。入社して一年が経ったと、ダイニングのカレンダーを見て気づく。実家暮らしだから金銭的には余裕があるし、残業して帰ってきてもご飯がテーブルにある。そもそも、残業なんてせいぜい一時間で、たいていは定時に帰ることができる。

「お父さんに感謝しなきゃね」

「わかってる。給料が出るたびにご飯をおごっているし、そんなに失礼な態度はとっていないと思うけどなあ」

「お父さんは娘に甘いからね」

母は口癖のようにそう言う。確かに、一人娘として甘やかされたという自覚はある。その点に異存はない。父はといえば、照れくさいのかテレビの野球中継に集中し、私たちの会話は無視している。よ

くある夕食風景だった。

私は、勘違いで卒業に必要な単位が足りず、大学で一年留年した。女の子が留年だなんてみつともないと祖母は言ったが、卒業しないのはもつとみつともない。就職活動とアルバイトで1年間を過ごした。しかし、二度目の就職活動は氷河期にぶち当たった。何とか自分を飾って、あまり向いているとは思えない接客業で採用されたが、半年もしないうちに音をあげた。当然ながら親は怒ったが、一人娘をそのままニートにさせるわけにはいかないということで、

「お父さんが、この前電車で偶然妹尾さんに会ったんだって。覚えてる？昔うちにもよく遊びに来てくれたおじさん。妹尾さんの会社で事務員が急に辞めることになって、募集をかけようと思っていたらしいの。契約社員だけど、どう？」

という話が持ち込まれた。コネはいやだったので、自分でも何社か探して面接を受けたがすべて撃沈した。やがて、  
「妹尾さんも、いつまでも待ってはくれないぞ」と父がせかしたために、面接を受けることとなった。

結果として、今の会社でよかったと思っている。私をとってくれた妹尾さんは県内に3つある支店のリーダーで、普段は別支店にいるから気を遣うこともない。同僚は、

「コネだつてことはみんな知っているよ。でも、だからなんだつてこともないし」

とさばさばしていた。

実際に働き出してみれば、給湯室での悪意ある噂話とか、明らかな差別とかはない。下っ端の私をかわいがってくれる人と、仕事さえしてくれば人柄なんてどうでもいいという人と、二種類に分かれていた。

私の会社は個人主義で、一人で弁当を食べようと近所のコンビニや定食屋へ出かけようと、何も言われない。私を直接指導した人も、個人に割り振られたパソコンを眺めながらスーパ春雨やおにぎりを

食べ、飲み会や社内総会は仮病で欠席する人だった。当然、協調性についてお説教してくることはない。

食卓に乗っているナスは、会社でもらったものだ。私の働く支店は、自宅の畑で収穫したものを全社員に配れるほどの規模なのだ。明日は、ナスをくれた出雲さんにお礼を言おうと思う。

出雲さんは、今日も8時前に出勤していた。

「おはようございます」

「おはよう。中島さん」

23歳だけど高校生に見える彩香ちゃんへは「チャン」をつけ、25歳で地味メガネ女の私は苗字で呼ぶ。今度、社内の問題点を箇条書きにして支店長へ提出するという課題があるけれど、彩香ちゃんはセクハラを訴えるだろうか？ 会社はそんなもんだとあきらめている可能性があるし、女性のクレームでくびにできるなら、出雲さんはとつくにここを去っている気がする。たぶん、彼は会社にとって利用価値があるのだ。

「なんか、難しい顔をしているね」

「いえ」

「もしかして、おめでた？ いや、セクハラじゃなくて、妻も妊娠中はずっと不機嫌そうだったからなんとなく」

悪気はない。なお悪い。きつと、悪阻の時にこの臭いを嗅いだら絞め殺したくなるだろう。奥さんはきつと物を投げたり衝動買いをしたりして、耐えたのだ。

「そうですか。おめでたではありません」

「そう」

しばし、気まずい沈黙が流れる。もっと冗談を言うべきだったのだろうか？ 私は体を30度くらい後ろに向け、

「クーラーは直りましたか？」

と尋ねてみた。

「うん。妻が昨日さっそく業者を呼んでくれた。日曜日は大変だった」

たよ。妻は子供たちをつれてショッピングセンターに避難したんだけど、俺は家にいたわけ。暑さには結構強いし、一人でたらだるするのでもいいかなって」

「そうですか」

必要な答えは、最初の二文字だけだと思う。言わないけど。

「昼間から梅にんにくと柿ピーをつまみにビールを飲んで、お昼は餃子にしたんだけどね。空き缶を隠し損ね、布団にビールをこぼし、パジャマには餃子のたれが飛んじやって。それで、妻に怒られたんだよ」

「はあ……」

「羽目をはずしすぎたのかなあ。独身気分に戻っちゃってさ」

出雲さんはおどけたように言った。

「パジャマですか？」

「だってほら、節水だよ。何度も洗濯機を回したり、暑いからって何度もシャワーを浴びたり、水がもったいないだろ。妻は毎回お風呂のお湯を入れ替えるけど、それだってもったいないと思うんだよね」

「ああ。地震が起きたときのために溜めておくようにとはいいませんね」

「そうそう。常識だよな」

出雲さんの残り湯は追い焚きしたら匂いそうだし、トイレや洗濯で再利用するのも厳しそうだ。

「どうせ次に使うのは自分だからと、小だけしたトイレを流さずにおいたら、それも娘に見つかっちゃって」

餃子の後だったらさぞかしにおうだろう。彼の家族に同情する。

「娘さんは何歳でしたっけ？」

「高校2年生。文才があるのか、よくパソコンに向かって何か書いているんだけど、俺には見せてくれないんだよね。『もし見たら、ベランダから飛び降りるから』とこの前言われちゃってさ。結構プロフィールが高いんだよ。小学1年生のときに書いた作文を、妻がプロ

グのネタとして使ったら、一週間ずねていたんだ。書いているのは小説だと思うよ。携帯じゃないあたり、俺の娘だなあ」

「そうですか」

「期待しているんだよ。『未来の大作家様へ。一番のファンより』というメモを沿えて、この前疲れ目に効くブルーベリー飴をプレゼントしたら、ばれたけど」

「そりゃばれるだろう。ムカデの断末魔みたいな字を書く出雲さんが、ここぞというときに美しいメッセージをかけるとは思わない。

「応援されたらうれしくない？」

「家族以外にはらしていると知ったら、たぶん、メモリをすべて消してベランダから飛び降りますよ。一番恥ずかしいことですから」

「ええっ。そういうもののなの？ そっか、会社のメーリングリストに添付して、感想を求めてみようと思ったんだけどなあ」

「似たもの夫婦だ。彼らの子供に生まれなくてよかった。」

「だってさ。書くってことは読ませることを想定しているじゃない？」

「どうでしょうね」

「そういえば、中島さんも趣味は小説を書くことだとか、読書だとか、履歴書に書いていたよね。そっか。だからわかるんだね」

「今は書いていませんけど」

「ふーん」

それは単純に、履歴書に面白いことを書けば面接で食いついてもらえるだろうかという考えだった。気まぐれで書き散らしたものを小説と呼び、父の本棚から年配の面接官に受けそうな本を選んで読んだのだ。

「いつか娘の書いたものを読んで欲しいなあ」

「それは、娘さんの決めることです」

案外、投稿サイトや自分のwebページで公開しているかもしれない。端末が携帯ではなくパソコンだとしても、それで内容が大きく変わるものじゃない。父親のような男が美しいヒロイン相手に青春

し、悲惨な結末を迎える安易な小説かもしれない。なんにしても、父親にその存在は教えないだろう。それくらい、出雲さんの娘を知らずとも、わかる。

かくいう私も、音楽の授業で作った曲を母親に利用されたことがある。自身で作曲しているような才能ある人に送りつけ、

「『単調でつまらない』という感想が来たわ。直しなさいよ」

と母経由で言われた。あまりにひどい出来だったのか、時間が足りなくなったのか、音楽教師も一人ずつ前に出て発表という形式は取らないでくれた。ネットで知り合った主婦に率直な感想を述べたその人は素敵だと思う。そうはいつても、10年近く経った今も恥をかいたことは忘れられない。

出雲さんが娘のパソコンから勝手に抜き出してきたとしても、読むのは遠慮しよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7885y/>

---

かぐわしい男

2011年11月23日15時52分発行